

フランドル

2007(平成19)年6月30日鑑賞<テアトル梅田>

★★★★



監督・脚本＝ブリュノ・デュモン／出演＝アドレイド・ルルー／サミュエル・ボワダン／アンリ・クレテル／インジュ・デカエステカー／ジャン＝マリ・ブルヴァール／ダヴィッド・プーラン／パトリス・ルヴァン／ダヴィッド・ルゲ（アルパトロス・フィルム配給／2005年フランス映画／91分）

……『フランドル』は、2006年のカンヌ国際映画祭で2007年の河瀬直美監督の『殞の森』（07年）と同じくグランプリ（審査員特別大賞）を受賞した名作。セリフの極端な少なさ、抽象性と哲学性そして素人俳優の起用は、韓国の天才キム・ギドク監督と同じ……？ ブリュノ・デュモン監督のテーマはいつも愛、セックス、暴力だそうだが、この映画にはレイプあり、その報復ありと盛りだくさん。しかし、最後には癒しが……。美しい田園風景と抽象化された戦場の対比を背景とした愛の寓話の中から、あなたは何を学ぶことができるだろうか……？

今年も『殞の森』、昨年は『フランドル』だが……？

2007年5月27日、第60回カンヌ国際映画祭において、河瀬直美監督の『殞の森』がグランプリ（審査員特別賞）を受賞し、日本国中が喜びに湧いた。グランプリは最高賞であるパルム・ドール賞に次ぐ榮譽ある賞で、日本映画としては1990年の小栗康平監督の『死の棘』以来2度目の受賞。

そんな目で見ると、この『フランドル』はその1年前、すなわち2006年の第59回カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した作品だから、昨年ヨーロッパで大きな話題を呼んだのは当然。しかしそんな傑作でも、日本で上映されるのは1年も遅れ、しかも大阪でたった1館だけというのは実に残念。コマーシャルリズムに乗った安易な映画を大量にスクリーンで流すのではなく、こんな良質な映画を早く、かつたくさんスクリーンで上映してほしいと願っている映画ファンは多いのでは……？

ブリュノ・デュモン監督はキム・ギドク流……？

韓国の天才キム・ギドク監督の映画は極端にセリフが少ないが、ブリュノ・デュモン監督の『フランドル』もそれと同じようにセリフが極端に少ない映画。

映画の冒頭、監督自身が育ったフランスのフランドル地方特有の田園風景が写し出される。そしてそこにある小さな村の農場で働き生きている青年デメステル（サミュエル・ボワダン）と、父親と2人暮らしの少女バルブ（アドレイド・ルルー）の姿が映しだされる。そして、デメステルとバルブが腕を組んで歩いていると、突然バルブがデメステルを誘うかのように2人は森の中に消えていき、そこでは……？ その間セリフは全くなし。したがって、観客はひきずり込まれるようにスクリーン上のシーンに集中させられることまちがいなし……。

こんな極端にセリフの少ない映画のつくり方や、これから紹介していくこの映画の抽象性と哲学性を考えると、ブリュノ・デュモン監督はひょっとしてフランスのキム・ギドク……？

素人役者を使うのもキム・ギドク流……？

この映画で、ある意味で男のセックスのはきだめのような、またある意味では聖なる少女のような存在となる少女バルブを演ずるアドレイド・ルルーは、プロの俳優ではなく素人から起用したとのこと。それはデメステルを演ずるサミュエル・ボワダンも同じだし、一度のセックスで(?)バルブを妊娠させてしまう村の青年ブロンデルを演ずるアンリ・クレテルも同じ。

パンフレットにある、この映画の脚本も書いたブリュノ・デュモン監督のインタビューによると、彼は「バルブ役のアドレイドは、まずスクリーンに映るアドレイドの外見が気に入りました。そこで一度脚本からバルブを消して、アドレイドの感性に脚本を導かせました。しかしアドレイドがそのままバルブになったわけではありません。役者は作品の中で中心的な役割を果たします。私は役者を選び、彼らのもたらしてくれるものに応じて物語を仕上げるのです」と語っている。これを読むと、起用する俳優についてのこだわりも、韓国のキム・ギドク監督そっくり……？

ちなみにバルブを演ずるアドレイドは美人でもなくそうかといってブスでもなく、またその本心をほとんど顔に出さないアドレイドは、何とも不思議な顔だち。他方、

男優の方は、アンリ・クレテルはわりとハンサムな顔だちだが、サミュエル・ボワダン
はアラン・ドロンとは縁もゆかりもないいかつい顔で、決して俳優向きとは思えない
顔だち。しかしそんな男と女だからこそ、この映画がつむぐアダムとイブのような
愛とセックスの物語、そして争いと癒しの物語には最適なのかも……？

何と味気ないセックス……？

映画の冒頭に紹介されるフランドル地方は寒い季節。したがって、予告編で何度も
みたバルブの額には毛糸のヘアバンドが巻かれている。またバルブの服装も、上は分
厚いセーターの上にジャンパー（？）を着たものだし、下はしゃれたスカートではな
くダサイスラックス姿……？ 他方、農作業の合間にバルブと一緒に抜け出したらし
い（？）デメステルの服装も、畑仕事にピッタリの農夫風……？

したがって、こんな2人が手に手を取り合って森の中へ消えていったのがセックス
を楽しむためだとしても、一体どこでどんなセックスを……？ そう思ってスクリー
ンを凝視している（？）と、草むらの上で展開されるセックスは、バルブがいきなり
スラックスを下着ごとずり下げたかと思うと、デメステルもズボンだけを下ろしてバ
ルブの上におおいかぶさるといういかにも簡易で即物的なもの。しかも、何の喜びの
表情もないままじっと空を見ているバルブを下にして、デメステルは激しく腰を動か
していたが、意地悪にもその回数をカウントしていると、20回もいかない間にダウン。
したがって、時間にすると1分も経たない間に2人の間のセックスはジ・エンド。

こりゃ、何と味気ないセックス！ ブリュノ・デュモン監督は、これによって一体
何を暗示しようとしているのだろうか……？

バルブはふしだらな女……？

バルブは幼なじみのデメステルだけでなく、男なら誰にでも色目を使うふしだらな
女の子……？ 少なくともバルブの表面上の行動だけをみれば誰だってそう思うし、
それは親友の女の子フランス（インジュ・デカエステカー）からも指摘されていると
おり……。しかし、そんな親友からの忠告をバルブはどのように受け止めているのか
観客は全く理解できないまま、バルブは次々と男たちを誘っている様子。

ひどいのはバルブとデメステル、そしてフランスと、フランスの彼氏の4人で一緒に
に食事をしていた時、1人カウンターで酒を飲んでいたらちょっとハンサムなブロンデ

ルを見つけたバルブがこれを自らナンパしたこと。

その結果、何と今バルブのお腹にはブロンデルの子供が宿ることになったから、大変。もっとも、そんなふしだらの一入娘をもった、父親はもっと大変だろうが……。

青年たちはなぜ戦場へ……？ 志願それとも徴兵……？

女は村の中で男を渡り歩いていればいい(?)が、男はそうはいかず、国家の危機に際して行動しなければならないもの……？ しかし今、デメステルもブロンデルもそろって兵士として戦場に赴くべく、トラックの中に……。ブリュノ・デュモン監督が描く彼ら農村の青年が兵士へと変身していく様子も、セリフが極端に少ないから、なぜそうするのかという動機が説明されず、それは観客の理解にまかせられている。したがって、これが志願かそれとも徴兵かもよくわからないまま、彼らは兵士に……。

また常識的に考えれば、田舎の青年がいきなり軍隊に入っても使いものになるはずがなく、少なくとも1年くらいは鍛えあげなければ実戦配置することはできないはず。しかし、ブリュノ・デュモン監督はそんな常識は不要とばかりに、トラックに乗ったと思っただけのシーンは、いきなり新兵として実戦配置された戦場で一人前の顔をした(?)デメステル、ブロンデル、そしてブリッシュ(ジャン＝マリ・ブルヴァール)、ルクレルク(ダヴィッド・プーラン)、モルダク(パトリス・ルヴァン)たちを登場させたからビックリ……？

戦場も抽象的……？

ブリュノ・デュモン監督が描く男たちの戦場もそれが一体どこなのか、またどんな指揮命令系統で動いているのかをすべて無視して(?)、完全に抽象化されたものになっている。イラク戦争当時は、アメリカ兵が村の民家を1軒1軒しらみつぶしに制圧していく姿をよくテレビニュースで見たもの。中尉(ダヴィッド・ルゲ)に率いられたデメステル、ブロンデルたちの部隊7、8名は大きなリュックを背中に背負い、1人ずつ馬に乗って砂漠のようなところを移動していたから、きっと彼らの戦場は中東のどこか……？

ブリュノ・デュモン監督にしてみればきっと、あの戦争におけるあの舞台と特定すると、自分が描きたい世界に無用な情報による感想や意見が入ってくると考えたのだろう。しかし、ある村に入った時、民兵(?)から一斉狙撃を受けた彼らの部隊はた

ちまち指揮官の中尉を失ってしまったから、その後は単なる烏合の衆……？

司令部も指揮官ももたない数人の兵士たちが訳のわからないまま戦場(?)をさまよい歩く姿はすごく異様。しかし、アメリカによるアフガン戦争もイラク戦争も、外見上はきちんとした組織戦の形をとっていたものの、ホントはこの映画と同じような孤独で孤立した戦争だったのかも……？

戦場での狂気は人間の本性……？

2007年6月26日付産経新聞「千変上海」は、米インターネット大手、アメリカ・オンラインのテッド・レオンシス元副会長が製作したドキュメンタリー映画『南京』が、中国全土での封切りを前に上海映画祭で6月22日に一般公開されたことを伝えた。これは、故アイリス・チャン氏の『レイプ・オブ・南京』を下敷きにしてつくられた映画で、反日史観色の強い映画らしい(2006年11月26日付産経新聞)。また、2007年2月24日付産経新聞では、中国の第6世代監督の旗手として注目されている陸^{ルー・チュウアン}川監督(36歳)が製作中の『南京! 南京!』について、中国総局の福島香織が詳しく紹介している。

「100人斬り」に象徴されるような旧日本軍人による中国人虐殺があったのか否かについては、冷静で科学的な検証が必要だが、戦場においては平常時の常識では考えられない人間の狂気が顕在化することは、どの国のどの軍隊でもありうること。ましてやデメステル、ブロンデルたちのように指揮官を失った新兵たちが敵地の中で孤独な行動を続けていけば、それはなおさら。したがって、彼らは村の少年を意味もなく殺したり、兵士か村人かわからない女を数人がかりでレイプしたうえ放り出してしまうという狂気の行動も平然と……。もっとも、若い兵士の中にはレイプへの参加を拒否する者がいたことは一抹の救いだが、彼らの中ではそれは哲学論ではなく単なる笑い話に……？

日本のテレビにさかんに登場するマスコミ御用達のコメンテーターたちが、したり顔で語るバカバカしい正論(?)は、平和で豊かな国そしてノー天気な国ニッポンだけで通用する机上の空論……。指揮官を失い、周りはすべて敵という状況下で移動を続けているデメステル、ブロンデルたちにとってはそんなお題目はどうでもいいことで、当面は動物的本能に従って行動するしか道がないのは当然。そんな修羅場をくぐっていく中、デメステル、ブロンデルたちの運命は……？

レイプの報復は……？

いくら近代装備を誇っていても、敵地における孤立した数名の部隊の実力はたかが知れたもの。したがって、ある日ある移動中、デメステルたちは民兵からの一斉狙撃を受けて伏せていたところ、直ちに捕虜に。民兵たちの拠点に連れて行かれると、そこでは既に捕虜となっていたブロンデルが手ひどい仕打ちを。

ここで想像を絶するすごいシーンが登場するからご注目！ それは、あのレイプされた女兵士の命令による報復。レイプした男たちは複数だったが、とりあえずその報復のターゲットとして選ばれた1人の男は可哀相なもの。1人連れていかれた部屋の中からは悲鳴だけが聞こえてくるから、そこで何が行われているのかはある程度は想像がつくだらう……。下半身むき出しで部屋から連れ出されてきた兵士の下腹部は大量に流れる血で真っ赤。そして、悲鳴をあげもだえ苦しんでいる兵士に対して、やっとならぬ銃弾が……。

この選択の心の底は……？

バルブが村の男たちに色目を使っていることは気に入らないものの、それを承知でデメステルがバルブにホレていることは明らか。したがって戦場に来ている今、バルブが妊娠したこと、しかもそのお相手がブロンデルであることを知ったデメステルが内心嫉妬に苦しんだであろうことは容易に推測がつくもの。しかし、この映画は恋愛映画ではないし、三角関係のもつれを描く映画でもないから、デメステルはそんな現実を受け入れるしかない。

捕虜状態から離脱し、デメステルはブロンデルと共に移動を続けていたが、再び民兵に襲われることに……。前回に懲りて、デメステルとブロンデルは今回は強行突破を試みたが、ブロンデルが足を撃たれて倒れ込んでしまった。さあ、デメステルはどうするのだろうか……。すなわち、ブロンデルを引きずってでも一緒に逃げるのか、それともそんなことをすれば共倒れになることは明らかだから、ブロンデルを見捨てて1人で逃げるのか……。デメステルは究極の選択を迫られることに……。

ネタバレ覚悟で解説すれば、デメステルはブロンデルを見捨てて逃げ出すことになるのだが、そんな選択をしたデメステルの心の底にはひょっとしてバルブをはらませたブロンデルに対する嫉妬の気持が含まれていたのだろうか……？

再会と再生は……？

ここまでのストーリー展開の中、フランドルの村の青年たちはみんな戦場で死亡もしくはボロボロになっている。また、故郷に残り家を守っているバルブも神経に異常をきたすほど心の病は深刻で、みんな踏んだり蹴ったりの状態……？

そんな展開の中、ブリュノ・デュモン監督はどんな結末にもっていくのだろうかと考えていると、ひょっこりデメステルが1人故郷へ戻ってきた。これも、どこの戦場で、どんな理由があって除隊となったのかと考えると訳がわからなくなるのだが、そこは抽象的に処理……。

デメステルにしてみれば、帰還した自分をバルブが温かく迎えてくれるものと期待していたかもしれないが、残念ながらそれは期待外れだった。そればかりか、神経に異常をきたしたことによって、普通以上に真実が見えるようになったのか、バルブはデメステルに対して「あなたはブロンデルを見捨てたのね。私は見ていたんだから」という実にきついセリフを……。

これによってデメステルは絶望し、すべてが崩壊するのかなと思っていると、実はそこからがこの映画のいいところ。人間はそこまで厳しくなれるのかというと、どうもそうではないらしい……？ その結果、バルブは再びデメステルの元へ。そしてデメステルはそこではじめて真実を告白。そこで抱き合った2人の心は……？

人間の再生とはこういうものかということが、大いなる説得力をもって描かれているところがこの映画のミソであり、第59回カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した所以だが……？

2007(平成19)年7月5日記